

## WHY YOKOHAMA? WHY ICP?

国際応用心理学会議 (International Congress of Applied Psychology : ICAP) の最中に開かれた国際心理科学連合の総会で、日本の横浜が2016年の国際心理学会議 (International Congress of Psychology : ICP) の開催地に選定されました。イタリアのミラノも立候補しており、双方がそれぞれの地で開催することの利点をプレゼンしたのち、世界各国の代表者による投票によってICP2016が横浜パシフィコで開催されることが決まりましたが、その際になぜ横浜で開催することが世界の心理学の発展のために望ましいのかを宣伝する必要がありました。すなわち、“WHY YOKOHAMA?”を説得する必要があったのです。

東京は2016年のオリンピック招致に失敗しましたが、われわれのICP招致は成功しました。成功に至るまでには、予算の計画、会場の選定、神奈川県知事や横浜市長などからのご推薦の拝受、各国代表者への事前の宣伝、投票日前日に開いた「Japan Reception」というパーティなど、いろいろな苦労がありました。招致委員会や広報委員会の委員の皆様はじめ、多くの方のご協力があったこそ勝ち得た成功です。

こうしてICP招致が決まりましたが、私の周囲においても、ICP招致に関心をもつ方は残念ながら多くありません。“WHY YOKOHAMA?”以前に、“WHY ICP?”を宣伝する必要があるようです。日本の心理学の発展のために、「なぜいまさらICP?」という疑問に答え、日本心理学会がICPを招致する努力を行った理由を説明します。

### 1. 論文の国際発信力を高める

心理学の分野において、日本のプレゼンスは高くなっていると思いますか？メルボルンで日本心理学会刊行の *Japanese Psychological Research* を印刷販売しているWiley-Blackwell社が、「Asian Round Table」という機会を設け、アジアの心理学を振興するための討議の場を用意しました。その際に、2008～2009年にかけて、世界全体の論文引用総数の上昇が7パーセントなのに対し、アジアの上昇率は35パーセント、とくに中国の上昇率は43パーセントという数字が披露されました。一方で、日本のことには残念ながら言及されませんでした。そ

れほど目覚ましいものではなかったことはたしかです。なにも、引用数やImpact Factorが重要だと主張したいわけではありませんが、これらが国際発信力の一つの指標であることはまちがいありません。このような現状に対し、ICPは国際発信を刺激する良い機会です。

### 2. 世界の研究者と渡り合う

引用されるためには、何が必要でしょうか。外国の論文の仮説やアプローチを基本的な部分で踏襲し、実験方法や分析方法だけを変えるようなコピー論文はあまり引用されないでしょう。オリジナリティのある研究が望まれます。世界の先端をいく研究者から話を聞くことは、オリジナリティについて考えるきっかけになるでしょう。また、オリジナリティを発揮するには、いくらか稚拙に見えても自分の考え方をよとする生意気さが必要です。もちろん、生意気さは態度で表す必要はありません。普段は謙遜した控えめな態度でも、研究のうえでは、百万人といえどもわれ行かんという心意気が必要です。

### 3. 外国語で自分の論文を表現する

いうまでもなく、国際大会では英語で発表し、英語で答えることが必要です。同じアジアでも、香港やシンガポールでは英語で教育を受けていますし、昨年訪れた韓国心理学会でも多くの発表が英語でした。ICPは英語で発表する良いチャンスです。開催までの6年間は、英語表現力を高め、自分独自の考えに基づき、世界の先端をいく研究者と互角に議論するためにちょうど良い時間の長さだと思えます。1972年の東京のICPは外国の心理学から学ぶという側面があったかと思いますが、2016年のICPは学ぶよりも議論する場であると位置づけたいところです。

### 4. 各国の心理学会との協力を促進する

日本心理学会は、現在、中国、韓国、オーストラリアの心理学会と協力協定を結んでいます。今後、アメリカのAPAやAPSなどとも協定を結ぼうとしています。ICPを日本で開くことによって、まずは日本を中心とするアジア心理学会のネットワークをつくるきっかけにすることができます。

以上の理由が“WHY ICP?”に対する答えです。合点していただけたでしょうか。なにとぞご理解いただき、ICP2016の成功のためにご協力をお願いいたします。

(日本心理学会理事長・帝京大学教授 繁榎算男)